
岩清水健一郎という存在

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

岩清水健一郎という存在

【Nコード】

N4060L

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

拙作『絶対の正義』に出て来た岩清水健一郎というキャラクターについていじめドラマ等を観たことから書いています。どうしてもあのようなキャラクターが生まれたのか、そしていじめについての私見も書かせてもらっています。

第一章

岩清水健一郎という存在

いじめをテーマとした作品も書かせてもらっていますが僕は『絶対の正義』という作品の中で岩清水健一郎というキャラクターを書きました。また彼の従弟に岩清水健也というキャラクターもいます。彼等の性格の特徴としていじめを絶対に許しません。そしていじめをおこなった相手に対してはそれがどれだけ過去であつても徹底的に糾弾します。

その糾弾の方法は残酷というものでは済まされません。学校や職場だけでなく相手の家まで来て抗議しますし家族も周りも巻き込みます。僕はこの岩清水というキャラクターを今まで書いた中で最も邪悪だと感想への返信で書かせてもらいましたがそれは根拠のあるものです。

何故こうしたキャラクターを書いたかというと僕が実際に見てきやものもありますがこのキャラクターに関してはそれ以上にテレビでのいじめドラマを観てです。『絶対の正義』では『人間・失格』をモチーフにしています。ここで僕が今まで観たいじめをテーマとしたドラマのキャラクター達について私見を述べさせて頂きたいと思います。

まず『人間・失格』ですがこのドラマのいじめは観ていて吐き気を催すものでした。人間とは醜いものでもありますがその醜さをこれ以上ないまでに映し出した作品でした。

このドラマでは演じていた役者さん達、いじめ役を演じていた方々に尋常ではないバッシングがありました。何しろ街を歩いていたら罵られ石を投げられ剃刀が送られました。拳句には街で何もわかつていない人に絡まれたこともあったそうです。これは伝聞や御本人のコメントですがそうしたバッシングのせいかいじめ役の方々は以後主役の方と競演される時はいい役でした。テレビ局も配慮した

のでしようがそれだけにこのドラマでのバッシングがどれだけ酷かったか予想されず。

僕はこのドラマでいじめる側のキャラクターの末路には常にガッツポーズをしましたが個人的に最も問題があったと思うのは父親の大場衛や影山留加です。まずは父親から書かせてもらいたいと思います。

彼は確かに息子を愛していました。しかし自分の頭の中だけでしか教育しようとせず世の中というものも我が子も何もわかっていませんでした。その結果我が子を信じず結果として追い詰めることになっていきました。確かに新見という誰もが嫌悪感を抱く、それこそ演じていた役者さんの人生まで左右しかねないような歪んだ邪悪な存在があったでしょう。しかし彼は結果として我が子を信じませんでした。そして最後の方まで一方的に責めて愚かな行動を繰り返しました。その結果我が子へのいじめを助長しそして破滅に至らせています。

これを愚かと言わずして何と言いましようか。僕は彼が最終回で自分を最低な父親だと言っていますがはつきりとそうです、と言うかも知れません。それまでの行動を見ているからです。大場誠を殺したのはかなりの部分彼であります。こうした親は実際に結構います。我が子を完全にわかっておらず誤った価値判断に基づく教育を行いどうしようもない事態にしてしまう親はです。我が子を信じないのも同じです。その時点で彼は父親失格であります。

『俺は最低の父親や・・・』

刑務所での自省の言葉ですがその通りです。我が子のことを何もわかっておらず信用もしてませんでした。そして事態を悪化させていきました。彼が誠のことを本当にわかっていれば悲劇は避けられたでしょう。しかし彼はそれをできませんでした。愚かという言葉すら生ぬるいかも知れません。

かなり冷酷だと思われるかも知れませんが死んだ人は絶対に帰っては来ないのです。それを考えれば彼の罪は絶対に消えませんし許

せません。彼はそれだけのことをしてしまつたのです。我が子を死に追いやつて居るのです。それでどうしてそのことを言わずにはいられましようか。

それはいじめをしていた松野祐次も同じです。最終回で彼はどん底にまで落ちています。そして糾弾され自殺までしようとしています。ですが彼の罪は許されないのであります。そのことも言わずにいられないではいられません。何しろ彼はドラマの中では常にじめる立場にいます。このドラマでは武藤和彦という徹底的に嫌なキャラクターが出ていますがまず彼の陰湿さも目につきました。

そして景山留加です。彼はそもそも兎を殺したりしています。兎達に何の罪がありました。この時点で許されない程心を病んでいるとしか思えません。そうした人間に誰かを救う資格があるでしょうか。僕はそれに全く値しない人間だと思えます。彼は新見の策謀で誠を助ける立場から陥れる立場になつたという人がいます。がそもそも誠が辛い時を見ていても学校では何もしていません。辛い目に遭つて居るのは学校であるというのです。そもそも勇気がありません。勇なきは、とは儒学の言葉ですが彼はそもそもそれがありません。そして異常なまでに心を病んでいます。見えている、感じているのは自分だけという人間なのではないかとさえ思います。

そうした人物が土壇場で、しかも己の異常さを見せたうえで誠を助けられるのか。そんなことが出来る筈がありません。廃人になつたのは当然の結末です。因果は確実に巡りその者を必ず罰します。そうした意味で大場衛にしても景山留加にしても当然の結末を迎えたのだと言うのはあまりにも冷酷でしょうか。

『僕は君を助けられた』

この言葉ですがそもそも彼は誰かを救う資格すらない人間です。罪のない兎達を殺した人間が何故誰かを救えるのか、廃人になつたのは天罰です。そのまま一生壊れているべきなのでしょう。それがそれが相応しい報いです。

このドラマでは人間が死んでいるのです。その結果それを観る目

が厳しくなるのは当然ではないかと思えます。誠が死ななければその目も変わったでしょう。しかし死んだ為にどうしてもその目が厳しくなってしまう。大場衛は父親として最低であり景山留加は人を救うに値しない人間と僕は観ます。迎えた結末がどんなものでありそれを招いてしまったのは他ならない自分自身です。新見や宮崎といった演じていた役者さんが素で道で攻撃を受けるような反吐が出る存在がいたにしてもです。彼等はそもそも己の偏狭な価値観や病んだ心により誠を死なせてしまいました。二人がその後の一生を重い十字架を背負うことになったのも当然の結末です。

そしてドラマの中でいじめ役の一人がオートバイ事故で瀕死の重傷を負いその親がです。

『うちの息子は死にそうなんですよ!』

この言葉を病室で言っています。しかし果たしてあそこまでした人間に生きる価値があるかという事です。僕は疑問に思えます。このドラマではどうしてもキャラクターへの評価が厳しいものになってしまいます。

次に『ライフ』です。僕はこのドラマで最も注目したのは廣瀬倫子というキャラクターです。最初はいじめられる立場で後にいじめ、しかもそれを率先して行うようになったということでは『人間失格』の武藤和彦と同じ立場にあります。しかし彼女が辿った経緯は武藤とは全く別のものになりました。

些細なことから仲間外れにされ陰湿ないじめを受けていきます。その中で彼女の心は傷つきましたし歪んでいきます。主人公の椎葉歩に助けを求めますがそれは拒まれます。そのことにより歩を激しく憎悪していきます。

その憎悪の結果歩を陥れ自分の身代わりにします。ここからこの倫子というキャラクターが異常なまでに醜くなっていきます。

自分をいじめていた仲間歩のことを話し彼女を完全に自分の身代わりにしてです。そこからいじめには常に先頭に立ち歩を攻撃していきます。

その陰惨さと醜悪さは顔にも出ていてドラマを最初から観ていてこれが同じ役者さんなのか、と驚く程です。この辺りは演じておられた星井七瀬さんの熱演の賜物です。

『私に何やったか覚えてるでしょうね』

こう言って歩に頭からお茶をかけた時の顔は物凄いものでした。その他の表情だけでなくその行動も極めて醜悪でした。しかも彼女は自分がいじめられていたことの記憶もあり逆恨みもありました。それが殊更醜悪にさせていたのですがその他にです。彼女には醜悪になる重要な要素があったと思います。

第二章

それが何かというと弱さでしょう。倫子はどう見ても非常に気の弱い女の子です。あの学園の設定から見て成績は非常に優秀で顔立ちもいいものです。その他の性格は本来は何処にでもいるような女の子でこれまでいじめにも遭ったことがなかったのでしょうか。親からも先生からも勉強のできるいい娘だったと思います。そうした娘が気が強い筈ありません。

その弱さが醜悪さを助長させたと思います。今僕の手元には一冊の漫画があります。『仮面ライダーSPIRITS』ですがその三巻で『人は弱いから』という言葉があります。弱いからこそ争いがみ合うのだと。倫子は弱いからこそ歩を身代わりに仕立てて自分が率先していじめる立場になりました。彼女はこの時は気付いてなかったのですがそれは何も変わってはいなかったのです。ただいじめられっ子がいじめっ子になっただけです。何も変わってはいなかったのです。

歩をかなり酷くいじめ歩は途中羽鳥未来がいなければ自殺してしまふところまで追い詰められています。そこから歩を執拗にいじめていきました。

その彼女に転機が訪れるのは園田優樹が彼女達が歩をトイレに連れ込もうとした時です。これは二回あり園田は最初は見ているだけしかできませんでした。しかし二度目で意を決した彼は立ち上がり歩を助けだします。

『誰も止めないからっていい気になるなよ』

この言葉と共に止められました。これが転機になっています。

ここでもし彼女が歩を再びトイレでリンチにしたらです。歩はこの時親友の未来を庇っています。未来がそれを知れば激怒していたでしょう。そして倫子を仲間達を含めて絶対に許さなかったでしょう。倫子自身もここで完全に冥府魔道に堕ち、それこそ人間・失格

での武藤和彦や宮崎、何よりも新見といった存在と同じ輩になつていたでしょう。園田は歩を救っただけでなく計らずも倫子も止めています。

そこから安西愛海の悪事も知つたりしていますがそこでトイレで歩くと話しますがこれは完全に居直りでした。要するにいじめられていたから自分がいじめて何が悪い、御前が先にやったんだ、という論理でした。原作の漫画でもこの場面はありましたが大体同じ様な感じでした。原作でも名前は違いますが醜悪さは同じでした。口元は笑っていて目は蔑みに満ちている、そうした醜悪な顔でした。ドラマでは全体的に歪みそのうえドス黒さに満ちた顔でした。その違いはありますがやはり醜悪な顔でした。

その醜悪な心のまま居直りを見せましたがそれで納得する人がいるでしょうか。聞いていて御前は最低だ、と返す人が殆どではないでしょうか。僕も実際にそう思いました。そして全部言つて歩の言葉を聞いてです。倫子はその顔を変えてきました。原作でもそうですがそれまでの己の醜さに気付いてきたからでしょう。

そしてそのことに気付きましたが愛海にそれを知られまた追い詰められていきます。その結果仲間達にも見捨てられ完全に再び孤立してです。いじめの標的に戻りそうになり歩が止めるのも振り切つて飛び降り自殺を計ります。

この時注目するべきは歩が追い詰められていた時にあざ笑つてです。

『飛び降りじゃ済まないよね』

この言葉を言っていることです。それがそのまま自分にはね返ってきたのです。その彼女は何か命は取り留めました。

しかし自分が馴れ合っていた友人と思っていた面々は誰も来ませんでした。これも原作と同じです。そして歩が見舞いに来ましたがそれは彼女にとっては自分の醜さと向かい合うものに他ならず絶対に会いたくない相手でした。

『あんたの顔なんか見たくない』

こう言いました。顔を背けてです。ですが歩は何度も見舞いに来て遂に倫子も自分のことを言って涙ながらに謝罪します。この時の顔はまるで取り憑いていたものが消えたかのようなものでした。原作でもあつた場面ですがこの時の顔はそれまでの醜さが全く消えていました。

『馬鹿で御免……』

本当に心から涙を流しそのうえで謝罪しました。僕はこのドラマでこの場面が最も好きなのですが心から悔恨し謝罪したからです。己の醜さと弱さを見てそのうえで改心したのです。最後は彼女は必死にリハビリをしていますですがそれはこれまでの弱さや醜さから何とか立ち直ろう、前に進もうとしているかの様でした。愛海に全ての罪をかぶせさせられてもそれでも彼女は最後はそれを選んだように見えました。倫子のしたことは絶対に許されないことですし誰もがそれを知れば糾弾するものです。しかし彼女は明らかに闇の中から光明を見出しました。『人間・失格』では誠は死にましたが歩は生きていることもあり好意的な評価になつていていると思います。しかしそれでも倫子は何とか光を見出せましたし救われました。

『ライフ』では倫子は歩、愛海に次いで重要なキャラクターだったと思います。第三の主人公と言つていいでしょう。いじめられる立場がいじめる立場になるとどういうものか、そして弱さに基づく醜さがどういうものか、非常によく描き出したキャラクターだと思います。彼女がこれからどうなっていくのか、そのことに非常に興味があります。

三番目のドラマは『小公女』になります。ここではミンチン先生を取り上げたいと思います。このキャラクターはアニメにおいても非常に不人気で世界名作劇場でのアニメ版ではラビニア共々視聴者の集中豪雨的なバッシングを受け演じておられた中村妙子さん、ラビニア役の山田栄子さんは剃刀を含めた抗議の手紙を多量に受けフアンの人達から降板してくれと言われ精神的にかなり追い詰められました。そうした過去があります。

このドラマでは三村千恵子と名前で樋口可南子さんが演じておられました。樋口さんは最初はセーラ役の志田未来さんに対して『いじめるわよ』と笑いながら言うておられたようですが話が進むにつれ精神的に追い詰められていったことがサイトでの御本人のインタビューからも窺えます。

ここでいじめ役についてお話させてもらいますと先に『人間・失格』での役者さん達への尋常ではないバッシングについて述べさせてもらいましたが、『ライフ』でもバッシングがありましたし星井七瀬さんもドラマの収録最中ストレスで身体の調子が悪かったそうです。熱演が結果としてそうした精神状況に至らせていたのでしよう。

『小公女』においてもアニメ版の山田さんや中西さんは『もうこんな役は二度としたくない』と言うておられたそうです。実際に御二人は今に至るまであした役は演じておられませんが。そして樋口さんも精神的な負担はかなりのものだったようです。

このミンチン先生はドラマ版では確かに生真面目なのですが精神的余裕が全くなく、そうした意味では後述の『泣かないと決めた日』の佐野チーフと同じですがそのうえお世辞にも経営能力はありません。教師としては熱心で優れているのでしょうかがその精神的余裕のなさと周りが見えない視野の狭さ、そしてコンプレックスの強さを見て経営者には不向きです。その彼女がセーラの家没落を知った時に結果として最悪の事態となりました。

『ええ、大嫌いよ!』

セーラに返したこの言葉は彼女の心をそのまま出してしまったものでした。セーラを集中的にいじめそれはもう虐待と言っていいレベルでした。アニメ版でもそうでしたがよくもここまでできるものだと思います。これは剃刀も来るだろうな、とアニメ版での同じ感想を抱きました。

しかし最後にセーラはもう一度豊かさを取り戻します。ここでセーラはミンチン先生を容赦なく地獄に叩き落すことができました。殆どの方がそうするでしょう。僕も同じです。

第三章

ここでセーラはミンチン先生を赦しています。それどころかそのまま学校に先生としていてもらっています。先生は自分に相応しい場所である教壇に専念するようになりました。彼女は本来生真面目でよき教育者であった筈ですがそれに戻れました。そうしてそれによってセーラの母に抱いていたコンプレックスも、そしてセーラに対する呪縛も断ち切ることができました。全てセーラの赦しからです。

そのまま卒業写真にも一緒に写っていました。あれだけのことをしてきた相手と一緒にです。そして最後にです。

『有り難うございました』

この言葉を言われています。

これは一見して美しい場面ですが果たしてそうでしょうか。僕はこれはセーラの復讐ではないかとも思います。

言葉として表現するならば『高貴なる復讐』でしょうか。セーラは本来の意味で誇りを持ち豊かなお嬢様です。それに対してミンチン先生はコンプレックスの塊で非常に浅ましい行動を繰り返してきました。ミンチン先生はセーラに赦されその自分を赦した相手と常に正対しなくてはならなくなりました。そうなると自分のそのコンプレックスや浅ましさを、陰湿さ、器の小ささをその度に心に刻まれます。己の醜さを振り返りそれを思い出すことは非常に辛いことです。過ちに責め苛まれるということとはかなり重度の人格障害者でもない限り誰にでもあることです。先に挙げた『ライフ』でも倫子は歩の見舞いを追い返していたのは自分のその醜さと正対するのが怖かったからでしょう。人は自分のそうした部分と正対することこそがもつとも恐ろしいことなのですから。

だからです。ミンチン先生はセーラに常にそれを刻まれていつているのです。その辛さはどういったものでしょうか。『人間・失格』

の新見の如き人と呼ぶにも値しないような最低最悪の下衆とは違いミンチン先生は人間です。人間だからこそ悪をってしまったのです。人間は善でもあり悪でもあります。ミンチン先生は善でもあり悪でもある人です。平成の仮面ライダーでは重要なテーマの一つは『人間とは何か』でしょうがその中で例え姿形がどういったものであれ心が人間ならばそれは人間であるのです。そうした意味で多くのキャラクター、異形にも変身したり正体がそうである彼等は人間であるのです。

『俺も闘う。人間として……ファイズとして！』

これは『仮面ライダーファイズ』第四十話での乾巧の言葉ですが彼はオルフェノクであります。しかし彼は人間として、と言いました。それは心が人間だからでしょう。平成ライダーでは多くのキャラが姿形から人とは何かを見ることが多いです。そしてそこから心を見て人とは何かを知ることが多いです。見てから知る、でしょうか。人は姿形が問題ではないのです。心が問題なのです。そうした意味でミンチン先生は確かに問題のある部分もありますがそれでも人間なのです。

そう、人間だからです。ミンチン先生はセーラと会う度に己のその卑しい部分を心に思い出させられます。これは非常に残酷な復讐ではないでしょうか。『ライフ』においても倫子は歩の笑顔に赦されました。しかしその己の醜さを自覚してです。そのうえで歩と会わなければなりません。思えばこれも辛いことです。

ミンチン先生のしたことも許されることはありません。とにかく様々な負の感情を見せましたし。しかしセーラの復讐はミンチン先生にそうした重い現在を刻み付けるものではないかとも思います。僕は『赦し』という言葉を使わせてもらいましたがこれは『泣かないと決めた日』においては主なテーマになっていると思います。

主人公の角田美樹は入社してすぐに陰湿ないじめに遭います。その中心人物だったのが佐野有希子チーフでした。

彼女はむしろミンチン先生や廣瀬倫子と同じでやはり人間であり

人間として善でもあり悪でもありません。上司からいじめられていて昇進に焦り思うようになっていない、そのことで鬱屈した思いを抱いている人でした。それが結果として美樹や彼女の前にいた山内静香に対するいじめになっていました。そして彼女自身はそのことをあまり自覚していませんでした。このことが問題でした。

やがて美樹をもつと見るように言われたり桐野マネージャーの言葉から美樹に対して穏やかに見るようになりました。ドラマの前半と後半でこの人は美樹に対する態度が変わっています。それを見ていると決して根っからの悪人でも腐り果てた輩でもないのだとわかります。桐野チーフが彼女が美樹のことを訴えてもです。

『認められないのは自分も同じではないのか』

こう彼女に告げたのはそうしたことがわかっていたからでしょう。佐野チーフはストレスに苛まれたある意味において被害者だったのです。このドラマでのイタリア食品部門の人は女性陣はおおむねそうでありましたが。

彼女の場合はそれにより美樹をかなり追い詰めてしまっていました。それに気付かないまでも態度を軟化させてからは認めるようになっていきます。しかしです。

ドラマの前半を見ていると山内静香に対するいじめは相当なものだったことが窺えます。おそらく訴えれば確実に有罪になるレベルです。美樹へのそれを見てもわかります。

美樹もあのままだと確実に退社して精神を病んでいたと思います。彼女の場合は桐野チーフや仲原翔太がいたからこそ踏み止まれました。苦勞してきた桐野や人を公平かつ温かく見られる仲原がいたからこそです。だからこそ耐えられた一面があります。

しかし山内静香は退社することになりました。それを佐野チーフを疎ましく思う梅沢仁部長によって付け込まれ退社させられそうになります。その時にいじめのことを突きつけられます。

その時これまでの自分のことを反省していた時にそのことを突きつけられて慌てて山内静香のところに謝罪しに行きます。一旦頭を

下げて謝罪してそれで終わりかと思われました。少なくとも本人はこれで終わった、とそれが表情に出ていました。ところがでした。

静香は彼女を許さないといいそのうえで自分のことを話します。

佐野チーフ自身も彼女のリストカットの跡まで見て愕然となります。そこで自分がしてきたことを知ってしまったのです。

慌てて彼女に謝りますがそれを拒まれます。そして。

「私の人生返して下さい！」

この言葉が止めのようになりました。それを受けて完全に我を失い酒に溺れリストカットに走りました。連絡がつかないことをおかしく思った美樹が自宅に行かなければどうなっていたかわかりません。急性アルコール中毒か出血多量で死んでいたことも考えられません。

そしてそこから梅沢部長にいじめを告発するという理由で懲戒免職にされそうになります。しかしこれは逆に梅沢部長の不正に気付いた桐野マネージャーや仲原の尽力により逆に梅沢部長が告発されてすんでのところでした。

最初佐野チーフは部外から自分の上に立った桐野マネージャーに反感を持っていました。しかしその桐野マネージャーに救われました。また美樹は静香に会い仲介までしてくれました。これまでで最も憎い、と過去言ったその相手に仲介してもらっています。

ここで桐野マネージャーという人物について言及したいのですがこの人は常に人をよく見えています。美樹を厳しいながらも常に助けています。美樹を陰ながら支えています。そして佐野チーフも助けています。僕が桐野マネージャーの立場にいたら佐野チーフの様な人はすぐに切ります。明らかにトップに立つ器ではないからです。心に余裕がなく周りが見えていません。そして人望も全くありません。やがて静香の時の様なことが起こり破滅していただしよう。しかし桐野マネージャーはその最初の頃の佐野チーフが中を持っているものに気付いたのでしよう。彼女も見ています。このドラマの主人公は美樹ですが佐野チーフはもう一人の美樹とも言うべき非常に

重要なポジションにいます。もう一人の主人公とも言つべきです。桐野マネージャーは真の悪には容赦していません。梅沢部長がそのいい例です。しかし佐野チーフは身体を張るようなことをしてまでして助けています。それは佐野チーフに見るべきものがあつたからに他ならないでしょう。

第四章

そして美樹の仲介で静香から手紙を受け取ります。そこにあつた赦しの言葉を受けて心から泣きました。許されないことをしました。それでも赦されたのです。己の酷い過去を知りそれと向かい合いそれから赦されてです。心から涙を流しました。僕はこのシーンが非常に好きです。『ライフ』では一番心に残ったキャラは倫子ですがこのドラマでは佐野チーフです。ドラマのもう一人の主人公と言つてもいいのではないのでしょうか。彼女は己の罪と心にある弱さと酷さ、そして赦されたことを知り人として本当に意味で立派な人になるでしょう。

このドラマでは弱さから万引きをしたり夫にDVを受けていたり派遣社員故に待遇に悩んでいたりです。そうした人物が出ています。彼女達もやはり美樹をいじめていますがやがて彼女の真実を知りその心を知って謝罪します。その行動は確かに許されるものではありませんでした。

ここで許されるものではないと申し上げましたがこれは周りの主観です。しかしいじめられていた本人である美樹は赦しています。ならばそれでいいのです。

よくいじめではいじめていた相手を後で関係ない人間が徹底的に糾弾したりもします。僕が書いた岩清水もそうした人間の一人です。しかし糾弾も必要ですがそれでもいじめられていた本人が赦せば、そして適度なところでその糾弾も止めるべきだと思います。それも情ではないのでしょうか。

このドラマではもう一人重要な人物が出ています。いじめの黒幕である立花万里香です。裏に回って策謀の限りを尽くし美樹を追い詰めていきます。

いじめの理由は簡単で仲原を自分のものにする為です。その為に仲原が見ている美樹を裏で追い詰めそのうえで会社から消し去ろう

としていました。

この時の万里香の表情はドス黒くガラガラヘビの音が鳴っていました。これだけを見れば万里香はただ邪悪な人間に見えます。

しかしよく見ているとです。彼女は腕を組んでいません。演じておられた杏さんのお話ですと執拗に欲しいものをどんな手段を使っても手に入れようとすると人間なのは事実です。しかし何かを怖がっているそうです。従って普通に身体の前で腕を組むのではなく自分を無意識に守る様に身体を包み込んでいるのだそうです。腕を交差させてです。そして子供の頃から両親に可愛がられ甘やかされてきました。苦勞も知らず叱られたこともないのでしょう。番組スタッフの方も言っておられますが子供のままなのです。

仲原と結婚はできませんでした。しかしです。覗いているその姿を桐野マナージャーに見られてです。

『人を陥れて手に入れた幸せなんて脆いものだぞ』

万里香はこの言葉を聞いて顔を曇らせて去ります。やはりここでも重要なのは桐野マナージャーは彼女を倒してはいません。そのままにしています。これは結末まで、です。決してそれをせすにいました。ドラマで一番の悪役であり黒幕なのにです。それがどうしてなのかについても後で僕の考えを述べさせてもらいます。

彼女の悪事はふとしたことから夫である仲原に知られてしまいました。そして仲原は二人の家で万里香に言いそのうえで彼女が作った食べ物全て払ってしまいます。二人の結婚写真には弾痕の如きヒビが入ってしまった。

万里香はそれを見てその場に崩れ落ちます。その裏の顔を最も知られたくない相手に知られそれがどうなるかを悟っています。この時の彼女の顔は蒼白でした。

そしてそのうえで、です。仕事を成功させた美樹のところに来て彼女に襲い掛かります。その憎悪の顔を露わにさせたうえで、です。しかしここで桐野マナージャーと仲原が来ました。そして美樹を助け彼女を叩きます。そのうえで仲原は彼女に対して言いました。

『そうやって一生人を羨んで生きていくのか!』

この言葉で遂に万里香も完全に終わってしまいました。自分に対してのその言葉にしゃがみ込んでです。泣き叫びながら言いました。『私は貴方が欲しかっただけなのに! 貴方の為だったら何でもできるのに!』

こう言って泣き叫んだのですがこの時に彼女は顔を沈めさせて泣いてはいません。顔を上げてそのうえで顔を隠さずに泣いています。ここに万里香がどういった人間なのかわかるのではないのでしょうか。この泣き方は子供の泣き方です。大人なら沈み込んで顔を隠して泣きます。しかし子供は顔をあげて隠さずに泣きます。万里香は無意識のうちにそうしています。腕を組まずに交差させているのもです。彼女は弱い子供でしかなかったのです。

こうした意味において万里香にしても倫子にしてもミンチン先生にしてもです。彼女達は本質的に弱い人間なのです。人は弱いからこそ、そしてそれを無意識のうちで自覚しているからこそより弱いと見た相手をいじめるのでしょう。人間の持つ最も醜い一面の一つです。倫子はそれを必死に否定したくてトイレで居直りましたし歩と会おうとしませんでした。ミンチン先生はそれをずっとセーラに思い出させられるという復讐を受けました。

万里香もです。彼女は全く強くありません。徹底的に弱い人間です。それを完全に曝け出してしまいました。最早彼女はここで終わってしまいました。

この後仲原との離婚を覚悟し家を出ようとなりました。そこに仲原が戻って来た時の万里香は弱々しい顔でした。あのドス黒い顔はありませんでした。

そしてそのうえで、です。彼女は仲原に対して言いました。

『今まで有り難う……』

俯いてこう言って彼の前から去ろうとしました。彼女にとっては全てだった仲原を諦めてです。そのうえで去ろうとしました。しかし仲原はニューヨークでの住所を見せてそれから彼女に告げました。

『もう一度やりなおそう』

僕はこの場面も好きです。仲原というキャラクターも大好きですが彼の無限の優しさは何よりも替え難いものです。万里香を赦しそのうえで彼女をつなぎ止めたのです。

彼のその無限の優しさを受けた万里香は涙を流しました。それは自分のその醜悪な顔を見てもそれを赦して受け入れてくれた仲原の優しさへの涙だけではないでしょう。人の思いやりを知り赦されること、そして人の心の美しさを知ったからでしょう。そうした意味で彼女は倫子や佐野チーフと同じです。

万里香を赦した仲原は一人考える顔で佇んでいました。その顔にはまだ悩みがありました。しかしかつて己が言った言葉を反芻して前に行こうとしています。それがはっきりとわかるものでした。

このドラマでは美樹、桐野マネージャー、仲原といった無限の優しさや強さを持つ人達が出て結果として人を救っています。若し彼女達がいなければいじめている立場だった佐野チーフや万里香は間違いなくやがて破滅していただでしょう。何故破滅していたかということです。

誰かをいじめているとです。それは誰にも見えないようにしていても必ず誰かが観ています。天網恢恢、疎にして漏らさずです。必ず誰かが見てそのうえでそれは周りに知られます。そうなればどうなるかです。

いじめがどういったものかは言うまでもないでしょう。人として最低の行いです。他の人はそのいじめている人を忌み嫌います。その結果周りから疎まれそのうえでやがてその感情が周りの然るべき対応を招きます。ですから結果として佐野チーフも万里香もやがて破滅していただでしょう。『人間・失格』の新見も究極の意味でそうなるのではないのでしょうか。あの背中を押した手は誰のものであるのか。今も色々言われています。ですがあの末路に異を唱える人はいないでしょう。かつて何の罪もない猫をネットでいじめ殺した輩がいましたが今どうやらかなり無惨なことになっているようです。

そのことにも異を唱える人はいないでしょう。誰もが当然だと思つ
ものです。人は悪事をすれば必ずそれが自分に返ります。因果応報
はこの世の絶対の摂理の一つです。ミンチン先生もあのままだと学
園を破産させていたのは間違いありません。自分の愛する学園をで
す。倫子はまたいじめられて自殺して終わっていたでしょう。その
際手を差し伸べる相手は間違いなく出なかつたでしょう。絶対の破
滅が彼女達を待つていた筈です。佐野チーフは懲戒免職になり万里
香は最悪の形で仲原を知られるか桐野マネージャーが本気で潰そう
としたでしょう。そして終わっていた筈です。

第五章

ここでいじめていた側の人間をもう一度見させてもらいます。廣瀬倫子にしてもミンチン先生にしても佐野チーフにしてもです。非常に惨めな人間です。

何故惨めかといいますと自分の醜さや浅ましさに気付いていないからです。そして結果として周りの目、やがて自分にふりかかる因果にも気付いていないからです。そのうえで最後に自分に向けられる他人の冷たい目にもです。彼女達は結果として最悪の結末からは逃れられましたがそれでもそれは赦されたからであり運もありました。若し彼女達がいじめていた人間が歩やセーラや美樹の様に強く清らかな人間ではなかったとしたら。そしていじめていた側の人間の味方に非常に残虐な人間がいたならばです。彼女達はただでは済まなかったのは確実です。己の結末にどうしようもなくうちのめされ再起不能になっていたでしょう。そうでなくとも彼女達は自分の醜さ、鏡を見ればそれこそその鏡が割れてしまいそうなその醜悪さにも気付いていないからです。それと共に周りの目にも気付いていません。これこそが惨めなのです。

そしてその惨めさを決定付けているのはその弱さです。自分の弱さを克服できずそのうえで醜い行動を繰り返しています。惨めと言わずして何と言えましよう。弱い証拠に人をいじめています。人間は自分より弱いと思った相手をいじめて自分が強い存在であると認識したい心理も持っています。これこそが弱さです。太宰治は人間は弱いものであると認識していました。しかしそれを認識することによりそれより先のものを見ることができたのではないのでしょうか。弱さを知ったのは一連のドラマではいじめられていた側です。歩は人を避け自閉気味になり倫子を助けられなかった自分に気付きセーラも世間知らずな自分に気付きました。美樹もまた自分の至らないところに気付き成長していきました。人は弱いものです。しかし

その弱さを知りそれを克服することにより本当の意味で強くなり優しくなれるものです。太宰治という異才は一貫して芥川龍之介というもう一人の異才を追っていた一面があります。その彼が『如是我聞』という作品で志賀直哉を批判した時です。彼は志賀の強さを批判しその時に弱くなれ、芥川のように、と書いています。

僕は志賀直哉も嫌いではありませんが太宰のこの部分の文章がとても心に残っています。彼はずっと芥川のことを思ってきていたのと共に弱さについても考えていたことが窺えるからです。弱いことは悪くない、その弱さを知ること、自覚できることによりそこから貴重な、素晴らしいものが得られるのだから。それを考えると弱いことは恥ではありません。そのこと自体は恥でも何でもありません。

問題なのはその弱さから目を逸らし逃げて醜い行動を取り続けることです。倫子にしてもミンチン先生にしても佐野チーフにしてもです。意図しているしていない、倫子のはつきりと認識していたようです。がどちらにしてもそれは非常に惨めなことです。尚且つその弱さから逃れられないで他の人に救われています。

彼女達は自分で光を見出すことはできませんでした。暗闇の中にいて俯いていただけです。その彼女達に光をかけたのはいじめていた側の人間だったり嫌っていて憎んでいた側の人間でした。彼女達は己のその惨めさをこれ以上はないまでに認識することになりました。自分が惨めな、本当の意味で惨めな存在だと気付くことにもなりました。彼女達の涙はそれだけに貴重なものであるのではないでしょうが。

彼女達は自分自身に気付くことができました。涙はその意味もありました。自分の醜さ、弱さ、惨めさに気付いたら二度とそうしたものに囚われたくはないと思うのが人間です。彼女達はそれに気付く暗闇から光を見ることができるようになりました。そうならばもうそこから立ち上がり先に進むでしょう。彼女達は何があるかと絶対に人をいじめることは絶対にしなくなりました。それはその弱く醜く惨めな自分に戻ってしまうからに他なりません。倫子や佐野チ

ーフはそれに苛まれ自殺未遂まで起こしています。ミンチン先生も危うく何があつても護りたかつた学園を失うところでした。ミンチン先生にとつての全てのものをです。ここで僕が知っているオペラのお話をさせてもらいたいと思います。

ヴェルディのオペラに『リゴレット』という作品があります。あえてこの表現を使わせてもらいますがせむしの道化師が主人公です。身体的にも身分的にも差別される側の人間です。時代設定も十六世紀頃です。階級の時代です。欧州の階級制度は日本のそれとは比較にならないまでに強いものです。それはもう絶対です。何しろ今もそれが残っています。欧州の教育制度にその名残が残っています。そうした社会です。その社会において生きているリゴレットは非常に鬱屈した存在です。そしてその鬱屈を領主である公爵のお氣に入りの道化師として廷臣である貴族をあげつらい貶めて笑いものにすることで晴らしていました。これは彼なりの復讐でした。

しかしこれにより貴族達から激しい憎しみを買ってしまった。それによって自分が何よりも大切にしていた愛娘ジルダをさらわれてしまいます。そのうえで領主である公爵に彼女を差し出されてしまいます。この公爵は非常に好色な人物であり領主であるだけでなく若くて美男子でもあります。舞台においては若手のテノールの練習役であつたり名のあるテノールが名曲を快く歌う役であつたりします。ルチアーノ・パバロツティが得意にしていた役の一つでもあります。ルチアーノ以外にもそれこそ無数のテノールが歌ってきています。『ラ・ボエーム』のロドルファや『カルメン』のドン・ホセ、『椿姫』のあるフレード等と並ぶテノールが必ず歌う役の一つです。

ここまで書いてお気付きになられた方もおられるでしょうが公爵はリゴレットとは全く正反対にいる人物です。ヴェルディはあえて音楽的にもそうしたそうです。その彼に娘が手籠めにされるのです。リゴレットは最初何とか娘の行方を探ろうとします。道化師である為わざと笑みを作りながら宮廷で貴族達にこれとなく尋ねます。しかし彼を憎む貴族達は彼を完全に拒絶します。何も言おうとはし

ません。リゴレットは精神的に次第に追い詰められ遂にこう叫びました。

『ジルダはわしの全てなんだ!』

その全てである娘を手籠めにされたのです。リゴレットにとってこれがどれだけ惨い仕打ちであつたことか。彼はここから公爵に対して復讐を誓いますがその公爵を愛していたジルダが彼の身代わりになつて殺されてしまつてです。結果として全てを失つてしまいました。最後に残つたのは娘の亡骸を抱いて泣き叫ぶ父親の姿だけでした。

リゴレットの場合はいじめは最初リゴレットがしていると言えます。そして貴族達にいじめ返されると言うべきでしょうか。ヴェルディのオペラの特徴として差別されている側にスポットライトを当てているということがあります。『トロヴァトーレ』ではジプシー達が出ていますし先程名前を出させてもらった『椿姫』ではヒロインのヴィオレッタは娼婦です。『ドン・カルロ』ではフランドルへの抑圧が背景になっています。『アイーダ』ではタイトルロールのアイーダは敵国の王女です。『ナブッコ』ではバビロン捕囚が作品の舞台でありバビロンにおいて虜囚となつているヘブライ人達が出ています。『オテロ』の主人公オテロはムーア人、つまり黒人です。他にも権力闘争や階級闘争等があつたりします。『マクベス』『シモン・ボツカネグラ』等がそれです。その中でリゴレットは抑圧された非差別者、人の心を踏みにじるいじめをする存在としてその中でもかなり独特のキャラクターです。その彼は結局全てを失つてしまいました。ミンチン先生も彼のようになつてしまつた危険は充分過ぎる程ありました。リゴレットでは主人公に救いの光はありませんでした。あつてもそれに気付ける人でもなかつたです。し、気付く機会もありませんでした。それで結果として全てを失つてしまつたのです。ミンチン先生は流石にリゴレット程歪な人間性ではないと思います。リゴレットを見ていて他人の不幸を嘲笑つた人間がそれに相応しい末路を迎えたに過ぎない、だがそう言い切れる人間は相当

冷酷な人間だ、と言った人がいます。僕は『人間・失格』ではかなり冷たく、突き放した見方ができますがそれでもこのオペラについてはそれは言えません。そう言えるにはあまりに陰惨で悲惨なものがあるからです。大場衛は息子を信じられませんでした。しかしリゴレットは娘を何処までも愛しています。同じ復讐でもそこに大きな違いがあると思います。大場衛は自分が悔やんでいる通り最低の父親です。しかしリゴレットは少なくとも父親としては心優しく愛情豊かです。おそらく大場衛と同じ状況でも娘を愛し続け信じていたでしょう。ここに大きな違いがあります。

リゴレットは哲学的な意味合いも強い作品です。元々はビクトル・ユゴーの『逸楽の王』が元になっています。この作品においては自分で娘を殺す羽目になっています。より悲惨な結末になっています。

倫子にしてもミンチン先生にしても佐野チーフにしてもです。万里香もですが因果としてリゴレットのように全てを失ってしまうところでした。しかし光が差し込み救われています。『人間・失格』では松野がそれに当たるでしょうが僕はこの人間も救われるに値しない存在だと思えますので除外したいと思います。結果としていじめは絶対に自分に返ってきます。それに気付ける人は幸いです。救われることができるのですから。ここまでお話しさせてもらったところでいじめられていた側の記憶についてお話ししてもらいたいと思います。

第六章

山内静香を見てもわかるようにいじめられていた側は何時までも覚えています。相手が立場を変えて何かをしてこないとも限りません。例えば暴力教師が相手でしたら教育委員会やマスコミに言うなりネットで公にすればいいです。暴力教師はこの世のダニですから次々と抹殺することこそが社会的正義です。僕は『人間・失格』の宮崎よりも遥かに酷い暴力教師を知っています。その教師もそうだったそうです。いじめていた相手がそうしたことをしないという保障は全くありません。人の世には復讐というものがあるのですから。まずは復讐を置いて美樹達のお話の続きをさせてもらいます。美樹達、歩もそうです。その無限の優しさで佐野チーフや倫子を救っています。セーラにしても確かにミンチン先生に刻み込んでいます。がそれでも救ったことは事実です。無限の優しさ、そして人として清らかなものを持っているからこそ彼女達を救えました。美樹達がいたからこそ万里香も佐野チーフも倫子もです。ミンチン先生も最悪の形での破滅から救われたのです。弱い、醜い人間が強く、美しい人間に救われたのです。それは心という意味においてです。ここで復讐にお話を戻します。

この復讐ですがその人が何らかの事情でしなかつたりできなかつた場合です。

『天にかわりて不義を討つ』

この言葉があります。悪をこの手で滅ぼすということですがこれを具現化した存在こそが岩清水健一郎です。

彼はまずいじめが絶対の悪だと認識しています。最低の行動でありそれは何としても糾弾しなくてはならないものだとかかっています。そうした意味において彼は善です。

しかし僕は彼を僕自身がそれこそ二次作品に至るまでこれまで書いたキャラクターの中で最も邪悪と言いました。その認識は今も変

わっていません。それは何故かということです。

彼はその糾弾の為に何の容赦もしません。手段も選びません。相手を周りや家族まで巻き込んで徹底的にかつ執拗に糾弾します。

同志達を集め数で責めます。そして過去を根掘り葉掘り暴きそれを周りに喧伝します。謀略を駆使してそのうえで孤立させていきます。

普通は家族など狙わないでしょう。家族には何の罪もないのですから。そして岩清水はそのことも承知しています。しかし何故家族まで攻撃、しかもその学校や職場に行つてそのいじめている人間のことを喧伝するかということです。

例えばです。誰かのお兄さんやお姉さんが学校でいじめをしているとします。岩清水はその人間に兄弟姉妹がいればそのうえでその兄弟姉妹の学校や職場まで言つてその相手が学校で何をしているのかその学校や職場の門で喧伝するのです。そうなればその兄弟姉妹はその学校や職場で完全に孤立し自分が責められるでしょう。

そうなれば本人に家で御前のせいであつた、と言うのは確実です。家族にも悪事を知られさらに辛いことになります。しかもそれで失業したり退学すれば本人をさらに責めるでしょう。家族の中でも孤立させるのです。

それと共に坊主憎けりや袈裟まで憎いの論理です。岩清水にはこの感情も非常に強くあります。

責める時に家族も平気で巻き込むのはこの感情とそしてそれが非常に効果的だからです。相手を追い詰めるには相手一人だけではなく周りも巻き込む、そうした非道な戦略を笑いながら執ることができます。

その時に自宅前でも学校や職場の前でも抗議活動を行います。それもまた周囲を巻き込むことを意図しています。近所の人や友人やそうした人達からも責められる、それまで笑顔を向けてくれた人まで糾弾されます。岩清水一人に悪事を糾弾されるだけでは済まずにです。そのうえで攻撃するのです。

この際に警察は何をしているのだと思われる方がいるでしょう。

実際に自宅や学校前まで来るといいうのは間違いなくアンフェアです。それどころか犯罪であります。ですが岩清水は邪悪な人間なのです。そして非常に奸智に長けています。その抗議の際に同志達に連絡をして所轄の警察に抗議活動を行います。とあるテロ支援国家の出先機関の抗議で警察署や官公庁に集中豪雨的な抗議をして通常業務すらできないまでにして黙らせるというやり方があります。岩清水はそれを行っているのです。同志達はいじめに対して怒る人間達です。悪を糾弾するとアジテートしそのうえで同志達を作りそのうえで活動を行っています。これはネット等で人を呼び掛けています。

そうして責めていきます。人は悪を糾弾することもまた好みます。人には良心があるからです。

岩清水は人に良心があることを熟知しています。そのうえで相手を攻撃していきますが同志を作ることもしています。一人では何をすることも限度がありますがそれでも同志達を手に入れそのうえで集中攻撃を浴びせるのです。どんな屈強な男でも取り囲んで集中的な抗議を浴びせればそれで折れます。折れたら後は徹底的に叩き潰すだけです。そこには微塵の情も容赦ありません。

責めて責めて責め抜いていきます。ネットでの実況放送や個人情報を公にしたりもしていきます。そうして次から次に責めていきます。相手を破滅どころか生命的に死ぬまで行います。

岩清水はここからが恐ろしいまでに残忍なのですが彼は相手が死んでも攻撃を止めはしません。死体に鞭打つという言葉通り相手の葬式の前に出て祝賀会を開いたりもします。相手が死んだことにその遺族の前で万歳三唱するのです。自分が殺したも同じその相手の前で、です。そのうえで悪がまた一つ滅んだのだと言うのです。

死んでも許しはしません。そしてネットで悪は滅んだ、と喧伝します。過去の悪事も一緒に載せたうえで、です。これが岩清水の行動です。ネットや現実、そしてありとあらゆる謀略を駆使して相手を完全に破滅させ死んでも攻撃します。人はこれを邪悪と言うので

はないのでしょうか。

僕は邪悪だと考えます。それで岩清水は僕がこれまで書いたどんなキャラクターよりも邪悪だと断言したのです。それが彼なのです。彼を書くにあたって複数の考えを含ませています。

『いじめは糾弾されるべきものである』

『いじめは糾弾されるべきだがそこには節度や倫理があるのではないのか』

『いじめをしている人間は目の前にこうした人間が出たらどうするつもりか』

『絶対の正義はあるのか』

『悪を糾弾するこの人物は邪悪ではないのか』

こうした複数の考えが僕の中にありそれを常に含ませて書いているキャラクターです。キャラクターとしてのモデルは鳥人戦隊ジェットマンの次元伯爵ラディゲ、仮面ライダー龍騎の北岡秀一、仮面ライダーファイズの草加雅人、仮面ライダーキバの初期の名護啓介といった面々です。彼等をミックスさせてキャラクターを考えていきますがそこにそうした複数の考えを常に念頭に置いて書いています。

彼は究極にまで卑劣で残忍で陰湿で執念深い人間です。そうした人間でも正義の側に立つことがあります。正義を行う立場にいることもあります。

邪悪な人間であつても正義の側にいることがあるということも岩清水を書くにおいて頭の中に入れてあります。前述の一連のいじめドラマでのいじめる側でのキャラクターは誰もが非常に弱い存在です。しかしそうした人達が岩清水が前に出て来たらどうなるのか。恐ろしいことになるでしょう。岩清水は相手が誰であっても、それこそ女性だろうがもう反省していようがです。全く容赦しません。何があるうとも責め続けます。相手が最も嫌がることを進んで攻撃し過去をほじくりだしてそのうえで糾弾し続けます。相手が反省しているなら余計にです。余計に攻撃していきます。彼は

相手が反省しているかどうかは全く意に介しません。そんなことは全く見ません。過去を糾弾するだけです。反省や謝罪はかえって攻撃の題材になります。それだけです。人の罪は未来永劫消えることはないというのが彼の考えです。だからこそ責めていきます。弱い人間なら彼に標的とされたらどうしようもありません。

再度申し上げますが彼のやり方はその相手の過去を徹底的に暴きそのうえで何処までも、周囲も家族も世間も何もかもを巻き込んで総動員して責めていきます。何の容赦も慈悲もなくです。相手が泣いても泣いて赦される罪か、で終わりです。謝罪しても謝罪で許されない罪がある、です。賠償しようが同じです。相手が何をしようとして徹底的に責め抜きます。さながら異端審問の拷問吏や地獄の獄卒の様にです。相手がどうなるうが全く構いません。そして相手を絶対悪に置き自分を絶対善とします。絶対悪には何をしてもいい、この認識の塊です。そのうえで周囲にもそう思わせます。彼は周りをアジテートしそれで糾弾する戦術にも熟知しています。この部分はナチスやソ連のアジテーションを参考にして書きました。

そして感情も入れています。いじめドラマでの付き物の感情ですがいじめをしているキャラクターに激しい憎しみを感じるものです。その憎しみは凄まじいもので前述の様に役者さん達への尋常ではないバッシングに向かいます。ネットでもいじめ役への書き込みは非常に攻撃的なものになっていきます。いじめよりもその役を憎んでしまします。罪を憎んで人を憎まずというのは理想論なのでしょう。現実には坊主憎けりや袈裟まで憎い、となるものでしょう。

岩清水は前述の通りに坊主憎けりやの人間です。ここでの描写はそのいじめ役への感情を書いています。

いじめ役へのそうした嫌悪や憎悪をそのまま向ければどういったものになるのか。岩清水はそうしたことも考えて書きました。彼は人間が持っている憎悪や嫌悪といった感情もそのまま書いているキャラクターなのです。

彼は確かにいじめを糾弾している立場として見れば正義になりま

す。しかし絶対の正義はこの世にはないものでしょう。一部のマスコミは自分達を絶対の正義に置いているようですがそうしたマスコミこそが今ネットにおいて最も糾弾の対象になっています。検証してみればそうしたマスコミこそが卑劣な工作報道を行っていた、行っていることがわかってきました。今ではそうしたマスコミは謀略結社扱いになっています。今でも全く反省せずに同じことを繰り返しているということが恐ろしいのですが。

読者の方の感想で岩清水の糾弾はマスコミのそれにも通じるというものがありました。がやはりこれもマスコミのそうした一面も参考にしていきます。またデモでの抗議活動もその糾弾のやり方のモデルにしています。

絶対の正義はない、そして絶対の正義を振りかざす岩清水はやっていることは邪悪です。人を許さずどんな手段を使っても墓場まで破壊しかねません。全てを巻き込みます。これを邪悪と言わずして何というかです。

岩清水というキャラクターは正義を振りかざす邪悪です。その行動だけでなくそうした意味においても極めて邪悪なキャラクターです。悪を糾弾する側にいる人間が必ずしも正義とは限りません。邪悪であることも充分過ぎる程考えられます。岩清水はそうした人間です。俗に正義の側に立っている人間が常に正義とは限りません。し邪悪とされる側にいる人間が常に邪悪とは限らないのです。結局のところ正義も悪も相対的なものでしかありません。しかし岩清水のやっていることは間違いなく邪悪です。このキャラクターについて僕は本当に様々なものを頭の中で考えて書いているつもりです。そこに込められているものも多いつもりです。読んでいて嫌悪感を抱かずにはいられないキャラクターですがこうした一連のことを考慮して頂ければ何よりです。

2
0
1
0
·
5
·
1
3

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4060/>

岩清水健一郎という存在

2010年10月8日15時02分発行